

エゾシカ保護管理と希少猛禽類保全の両立を図るセミナーについて

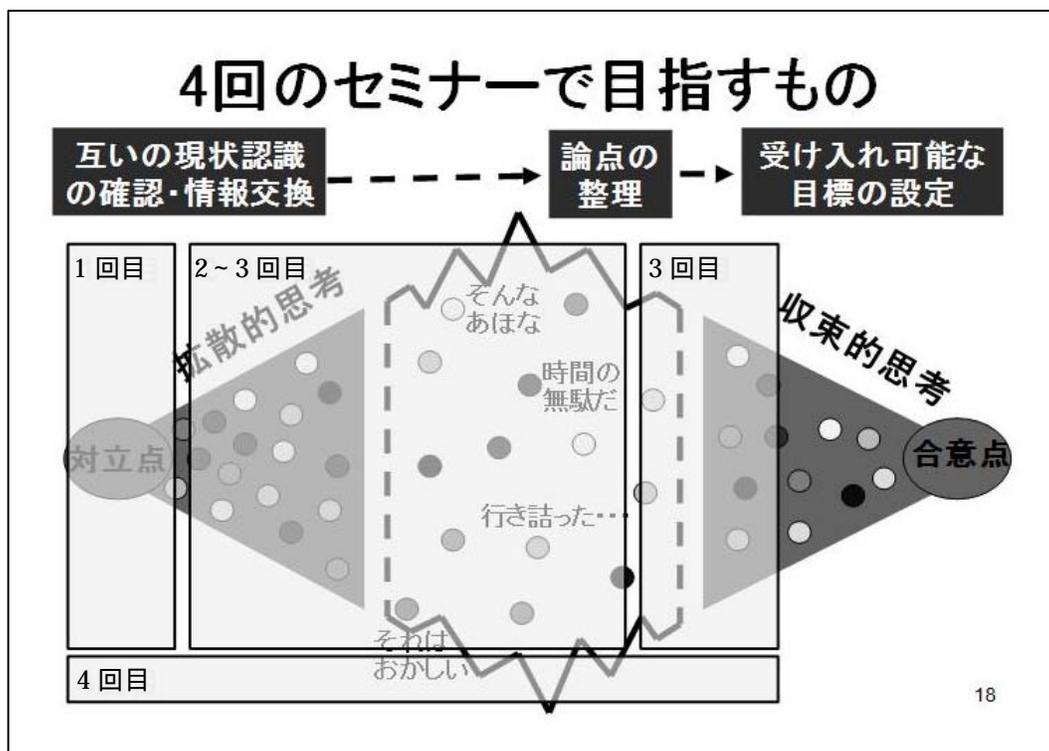
北海道大学農学院・森林政策・D3 今榮博司

背景

北海道大学環境科学院/農学院環境資源学専攻は共同で GCOE プログラム「統合フィールド環境科学の教育研究拠点形成」を実施しており、そのプログラムの一つに、学生や教員の自由な発想による人材育成企画に対して助成をする「人材育成自由企画」がある。この助成を得て、知床の増えすぎた種（エゾシカ）と減りすぎた種（希少猛禽類）の保護管理の両立を事例とし、エコシステムマネジメントを担う若手研究者の育成を図っている。

取り組みの特色

- ・ 博士課程以上の学生向けの人材育成を主眼とし、シカ及び希少猛禽類の研究者のご協力を得ている。また、行政など実務関係者の参加も適宜呼びかけている。
- ・ 知床のシカと希少猛禽類保全の軋轢を事例としているが、現実的にどうするかを決める合意形成は目的としていない。シカ及び希少猛禽類それぞれの研究者の軋轢に関する認識やその背景を明らかにし、お互いのずれを確認しつつ、問題意識を共有するという合意形成プロセスを参加者全員で体験的に学ぶことを目的としている。
- ・ 対立点を基に拡散的に話し合い、混沌とした状況を経た後に論点の絞込みを行いつつ、議論を収束の方向に導く「コンフリクトマネジメント」の考え方（下図参照）や、付箋を用いたワークショップによる議論の「見える化」手法を応用している。



図．コンフリクトマネジメントの考え方に沿った4回のセミナーの構成

取り組みの内容

- 1 回目 (6月28日): シカとシマフクロウの基本的生態を講義形式で学んだ。シカの「高い繁殖力、大規模な季節移動と越冬地の選択、植生への大きな影響、メス成獣捕獲の重要性」と、シマフクロウの「生息状況、低い生存率、強い定着性と排他的な生息地利用、生存への脅威、生息地保護の必要性」が、貴重なデータとともに示された。
- 2 回目 (10月3日): オオワシ・オジロワシの基本的生態、シカ・希少猛禽類の保護管理の現状と課題、及び両者の軋轢について、講義形式で学んだ。その後ワークショップ形式に移行し、学んだことを確認しつつ、論点を「植生への影響、人との絡み、捕獲」等、ある程度絞り込んだ上で、シカ・希少猛禽類それぞれの認識をぶつけ合い、お互いの考え方の背景についての理解を深めた。
- 3 回目 (11月13~15日予定): 知床での現地視察やロールプレイワークショップを含む2泊3日のツアーを予定。ワークショップでは、参加者をシカ・希少猛禽・住民の3グループに分け、模擬的に隣接地区の管理計画策定に向けて話し合う。管理目標、目標達成のための課題、課題克服のための取り組み、について、合意形成を模擬的に図る。
- 4 回目 (年明けを予定): 公開シンポジウムでシカと希少猛禽類の軋轢問題を市民と共有する。学生による発表と専門家によるコメント、一般参加者も含めた総合討論を検討中。

中間のまとめ、及び今後の展望

第1~2回目のセミナーを通じて、シカ及び希少猛禽類の専門家同士でお互いの背景についての理解が進み、学生にとっては個々の専門分野にとどまらない総合的視野を持つことの重要性について認識が深まったと言える。今回のセミナーでは、拡散 混沌 収束というプロセスをワークショップ形式で管理することを試みたが、そのようなやり方はある程度機能することも確認できた。その鍵は、両者が本音で話せる環境作りを準備段階から図ったり、合意を焦らずとことん話し合ったりするなど、信頼関係の醸成を最大限意識した取り組みにあったと考えられる。今回のセミナーでは、合意形成はしないということを何度も確認した。それは、これまで情報管理に非常に敏感な希少猛禽類研究者の協力をシカ関係者が得る必要が生じた際には、胸襟を開いた話し合いの場もお互いの信頼関係を構築することもないまま、何らかの意思決定が希少猛禽類研究者に迫られた為、希少猛禽類研究者は慎重にならざるを得なかったという経緯があったからである。今回のセミナーには希少猛禽類研究者も前向きに取り組んで頂き、またセミナーに対してこれまでのところ高い評価を頂いている。お互いに理解し信頼し合うための取り組みを進めることが、両者の合意形成に向けて先決と考えられる。

また今回は、シカと希少猛禽類の専門家同士での話し合いが中心だった為、生態学という共通の基礎を有しており、お互いについての理解が進みやすかった大きな要因だったと考えられる。多様な主体で合意形成を図る際には、基礎となる考え方や関心事が多岐にわたる為、プロセス管理に対するアプローチにさらなる工夫が求められると考えられる。

参加する学生が少なく、学生向けの広報を改善する必要があるが、参加した学生には第3回目のロールプレイワークショップを通じて合意形成プロセスをきちんと体験的に学んでもらい、第4回目の公開シンポジウムで学んだことを市民と共有できるよう、今後のセミナーの運営にも工夫をこらしたい。また、関係各位のご協力に改めて感謝したい。